京都大学 人と社会の未来研究院
広井良典

この度は大変貴重な機会にお話をさせていただきましたこと改めて感謝とともに、拙い報告内容について、多くの印象深い御指摘や御意見、御質問をいただき誠にありがとうございました。以下簡潔なものですがそれについてのコメントとなります。

●天笠座長の御指摘にもありましたように、また私自身の報告でも述べましたように、現在は人類史的に見てもかなり大きな時代の転換点であり、したがって“（超）長期の時間軸で物事をとらえていかないと、この先の数年～数十年の展望も見えてこない”ような時代状況にあると認識しております。したがって、（ビッグヒストリーなどとも関連しますが、）学習指導要領でもそうした（超）長期の視座が重要になってくるものと考えます。またそれは、「持続可能性」というコンセプトともつながってくると思われます。

●高橋委員や秋田委員から言及いただきました「人生前半の社会保障」に関する論点は、きわめて重要なテーマと考えており、またこうした文脈での「教育」の意義が一層高まっていくと思っております。御指摘にありましたように、大きくは「教育→個人の資質をポジティブに伸ばしていく」、「福祉→最低限の保障ないしセーフティネット」という区分があると思われますが、成熟社会においては、この両者がかなりクロス・オーバーしていくのではないかと考えています（たとえば 90 年代のイギリスで唱えられた「ポジティブ・ウェルフェア」の考え方など）。

●石井委員からも、教育という領域が「経済政策つまり成長のための教育」、「社会政策つまり分配や平等、市民参加等」という二つの性格をもちうる点についての御指摘がありましたが、これは以上の高橋委員や秋田委員からいただいたテーマとも関連する内容と思います。

こうした話題については、少々単純化した内容になりますが、

＊「個人が共通のスタートラインに立てることが保障されるような社会システム」
＊その上で、「個人が自らの人生を多様な形でデザインし、“好きなこと”を追求し伸ばしていけることが、持続可能性やウェルビーイング、ひいては（広義の）イノベーションや経済活力にもつながる」

といった視点が一つの基本になるのではと考えています。

御質問いただいた「Society５．０」との関連については、報告の中で「人類史における第三の定常化」として述べた社会像と重なっている部分が一定あると認識しております。一方、（「Society５．０」の内容を十分に理解していないため推測が含まれますが）私の提案している社会像のほうが、「拡大・成長」よりも「持続可能性」に力点が置かれており、また、先日の報告では十分説明ができませんでしたが、デジタルないし情報の次に来る（「生命」を基本コンセプトとする）「ポスト・デジタル」の時代を重視しているという点に若干の相違があるように感じています（ちなみに先日の資料の「付論　ローカリゼーションと「生命」の時代」に関連の記載を入れさせていただいております）。

●市川委員からいただいた、「学校・教科・教師」との関連ですが、実は私は父親が（公立）中学校の社会科の教師で、教師という仕事はそうした意味でも身近なものでした。残念ながらそうした具体的な内容に議論を展開できていないことは十分自覚しており、今後の私自身にとってのテーマとしていければと思います。直感的な問題意識としては、やはり現在の日本の教育システムは、明治以降あるいは高度成長期的な「拡大・成長」や「集中」に向かうベクトルや論理がなお強く残っており、それを「持続可能性」や「分散」ないし多元化、ローカル、コミュニティ等と言った方向にいかに展開していくかが重要な論点ではないかと考えています。

●秋田委員から、上記の「教育と福祉」に加え、個人にとどまらない地域、地球、環境といった価値にどうつなげていくかという御指摘があり、これもきわめて重要なテーマと認識しています。また big history と personal history をつなぐという、大いに示唆に富む御指摘もいただきました。個人的には、いわゆるＺ世代論や、私の報告の中でふれさせていただいた若い世代の事例にあるように、そうした萌芽は（上の世代以上に、新たな時代の価値観として）すでに若い世代に出始めており、もしかしたら（私を含め）教育する側や世代のほうがそうした視点が不足しているかもしれないとも思いました。

●奈須委員の御指摘の「コミュニティ」の「しがらみ」論はまさにその通りと思います。私自身は（象徴的な意味での）「農村型コミュニティ」と「都市型コミュニティ」という対比を行っており、「空気」や「忖度」が支配する前者に傾きがちな日本社会について、「個人がしっかりと独立しつつ、集団を超えて個人と個人が（ゆるく）つながっていく」ような後者の関係性を浸透させていくことが最大の課題と考えています。これについても、かなり期待を込めて記せば、“集団で一本の道を登る”志向の強かった高度成長時代前後の世代に比べて、現在の若い世代は、少なくとも潜在的にはそうした新たなコミュニティに親和的な可能性をもっていると思います。

●貞広委員が御指摘された、もしかりに私が報告で述べたような社会を実現させようとした場合、それはどのようにして可能か、合意が得られるかという点は、最終的にもっとも重要になってくるテーマだと思います。これは私にとってもまだ答えが出ていない、現在進行中の課題ですが、考えられることとしまして、①高度成長期とは異なる、「成熟社会の豊かさ」のビジョンを日本社会が描き、共有できること、②基本的に人々の価値観や行動様式はその時代の社会的状況に適応的に「進化」していくものであり、先ほども少しふれたような若い世代は、すでに新たな時代にふさわしい意識や価値観を持ち始めているという認識、③研究者の役割としては、①のような社会像や政策を含めた提案、発信を行っていくことが求められる、といった点が挙げられるのではないかと思います。

以上、大変雑駁な内容となりましたが、私のほうからのコメントとさせていただく次第です。あらためて先生方からいただきました貴重な御意見に感謝申し上げます。